様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　７ 月　２ 日現在

機関番号：２７６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ１４０２０

研究課題名（和文）新任教師がもつ生徒指導におけるジェンダー観の構築・変容過程

研究課題名（英文）Process of Building and Changing the Gender Perspective of New Teachers in Student Guidance

研究代表者
寺町　晋哉（Teramachi, Shinya）

宮崎公立大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０７７５７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では主に四つの点が明らかになった。第一に、彼/彼女らの学校時代の友人関係や学級経験に影響されており、新任教師として働く中でも学校時代の経験は影響力をもっていた。第二に、教育実習先の指導教員たちから、児童生徒の関係に対するジェンダー・ステレオタイプが伝えられ、新任教師になる前から児童生徒の関係にジェンダー・バイアスをもっていた。第三に、『月刊生徒指導』で扱われるタイトルにおいて、「男女」は異なるものとして描かれており、生徒指導言説におけるジェンダーも見出された。第四に、新任教師は質量ともに膨大な業務をこなさざるを得ない「担任の責任」がのしかかっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の「ジェンダーと教育」研究では、学校におけるジェンダーを再生産する担い手として、教師は批判対象になる傾向にあった。一方で教師がもつジェンダー観がどのように形成されているのかは明らかにされることが少なかった。
本研究の学術的意義として、教師のもつ生徒指導におけるジェンダー観は、学校時代の友人関係や被教育経験を基盤としながら形成され、学校現場の先輩教師や生徒指導言説が新任教師のジェンダー観を変容させる契機にならないことを明らかにした点が挙げられる。また社会的意義として、「担任の責任」が新任教師としの過酷な労働条件になっていることを明らかにした点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：Four main points were identified in this study : first, they were influenced by their school-age friendships and classroom experiences, and their school-age experiences were influential even when they were working as new teachers ; second, their tutors conveyed gender stereotypes about school-student relationships and had gender bias in school-student relationships before they became new teachers ; third, in the titles covered in the Monthly Student Guidance, "men and women" were described as being different, and gender in student guidance discourse was also found ; fourth, new teachers had the "responsibility of homeroom teachers" who had to carry out enormous tasks in both quantity and quantity.

研究分野：教育社会学

キーワード：ジェンダー　新任教師　学級　生徒指導

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

従来の「ジェンダーと教育」研究において、様々なジェンダー・ステレオタイプに基づいた教育課題が指摘されてきた。特に、児童・生徒-教師間の相互作用において、教師が意識的・無意識的にジェンダー・ステレオタイプな生徒指導をすることが数多く指摘されている。そのため、児童・生徒が各自の個性を発揮する際に教師がそれを阻害しないよう、教師がジェンダーの視点を身につけた上で、生徒指導へ臨めるようにすることは重要な課題である。しかしながら、

従来の「ジェンダーと教育」研究は、教師の教育実践が「いかにジェンダー不平等か」ということへ着目するあまり、ジェンダーの再生産という「結果」を非常に重視していた。そのため、教師がジェンダー・ステレオタイプな教育実践を行った文脈に焦点を当てることで、その背景にある教師のジェンダー観は、即時的な側面のみ取り扱われる傾向にあった（木村 1999 など）。そこで看過されていたのは、教師のジェンダー観を構成する個人的要因（生育歴・被教育経験、ジェンダー学習など）、学校現場の文脈（学校文化、同僚教師、児童生徒、保護者など）、社会のジェンダー観（時代によって変化するもの、固有のもの）、教育言説（性別特性や個性の重視、男女平等など）といった要因の多層的・歴史的側面と、教師個人の可変性である。つまり、教師のジェンダー観が「いかにして産み出されているのか」という「過程」と、「どのように変容するのか」という通時的側面への着目が必要になる。

しかしながら、教師の生徒指導におけるジェンダー観がどのように構築され、教師としての経験がそのジェンダー観へ与える影響に関しては、未だ明らかになっていない。

２．研究の目的

そこで、本研究は、新任教師の生徒指導におけるジェンダー観が構築される過程と、教職経験を通じて変容する過程を、「個人的要因」、「学校現場の文脈」、「社会のジェンダー観」、「教育言説」の四要素に着目しながら明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、新任教師へのインタビュー調査を複数年にまたがって追跡的に行った。まずは、教職未経験である大学４年生へのインタビュー調査を行うことで、学校現場の文脈の影響を統制しながら、彼（女）らの生徒指導におけるジェンダー観を明らかにした。また、新任教師に対する影響力は、学校現場の文脈が非常に大きいと考えられるが、学校現場の文脈を構成する上で、教育言説の果たす役割も無視できない。そこで本研究では、『月刊生徒指導』を用いて生徒指導に関する教育言説を分析を行った。

４．研究成果

①新任教師たちの学校教育経験

教師を目指す学生が抱く生徒指導観や学級経営観、理想の教師像は、彼/彼女らが経験した友人関係や学級、お世話になった教師などと関連して語られていた。これらの語りは教壇へ就く前のものであり、実際教師として働く中で児童生徒の実態や学校文化の影響により、彼/彼女らの認識は変化していく。ただし、学級経営観や生徒指導観の中心となる考えについては、継続調査をしていく中でも変化することなく語られていた。そのため、彼/彼女らの学校教育時代の経験は少なからず影響力をもっていると考えられる。

彼/彼女らの学校教育経験の中で、ジェンダーに関連した語りが見られたものは、友人関係についてである。特に協力者の８名が女性ということもあり、「女子の友人関係」が多く語られた。「女子の友人関係」以外で関係性とジェンダーを結びつけた語りは、「女子と男子の関係性の違い」、「ジェンダー化された生徒指導観」、「『男女は異なる』という前提」が見いだされた。

第一に「女子の友人関係」に関する語りである。「女子」は「グループ」を構成し、場合によっては「仲間外し」や「無視」といった形で、その関係性から排除する可能性もあると認識されていることが分かった。当然のことながら、彼女らにも仲の良い女子の友人は存在し、「自分の言いたいことを言える」非常に良好な関係を築いている。しかし、その良好な関係性と「女子」を結びつけるような語りはみられなかった。彼女らの語る良好な関係性は一対一の個人的な関係が多いこともあるだろうが、自分の所属先ではない女子グループの良好な関係性（あるいはトラブルが明確に語られない）が語られる際も、それを「女子」と結びつけることはなかった。そう考えると、何らかのトラブルや集団内の軋轢や緊張感が可視化された状態の時にはじめて、「女子」と「グループ」を関連づけて語られ、しかも否定的な評価が下されている。

第二に、「女子と男子の関係性の違い」である。彼/彼女らの語りでは、男女を対比対比させた上で、女子に対する否定的な評価を下すものが多かった。単純に男性の関係性の優位性を語るというよりも、関係性の評価に関して、焦点の当て方が異なる可能性が示唆された。というのも、彼女らの語る男子の関係性は、「さっぱりしている」、「（最後には）全体でうまくやっ

てる」、「言いたいことが言える」というように、最終的には「良い部分」に焦点化されているのに対して、女子の関係性については「ネチネチしている」、「人間関係が大変」、「陰で言っちゃう」などの「悪い部分」に焦点化した上で、男女の関係性を対比して語っているのである。つまり、ジェンダー化された関係性は、非対称な対比を行った上で、女子の関係性に否定的な評価が下されていた。

第三に、「ジェンダー化された生徒指導観」である。自らの経験に基づいた女子の関係性に対するジェンダー化された認識が生徒指導観へ直接的に結びつくことが明らかとなった。また、もう一点重要なこととして、教師になる初期の段階で一つの指針となる実習担当の教師から、ジェンダー化された生徒指導観を伝えられることも示唆された。

第四に、「『男女は異なる』という前提」である。男性協力者は女子生徒との距離感が難しいことの理由として、「女子ならではの気持ち」、「女子の感性」の存在を挙げる。同性である男子生徒との距離感も慎重であろうとする姿勢は語っているが、「難しさ」が語られることはなかった。また、異性の友人関係が成立しにくいということである。このような語りは彼女ら特有のものではなく、協力者の大半が同性による友人関係を語っていた。

②学校の友人関係がもつ特殊性

調査協力者が抱く生徒指導観において、ジェンダーの影響が強く見られたのが友人関係であった。この「学校の友人関係」は社会における人間関係の中でも独特の特徴をもっていることが文献研究で明らかになった。

友人関係は自由で選択可能であることが指摘されているが（石田 2021）、学校に限定すると異なる姿がみえる。小中学性の友人関係を調査した藤田・伊藤・坂口（1996）では、「ふだん仲良くしている友だち」の約 9 割が学校のクラスやクラブを基盤としており、小学生の 8 割以上、中学生の 6 割以上が「同じクラスが多い」と答えている。近年でも同様の傾向が見られる。東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で行った「子どもの生活と学びに関する親子調査 2017」において、特に義務教育段階では同じ学校で「友だち」が形成される傾向にあり、インターネットが発達したからといって学校外へ「友だち」の輪が広がるわけではないことがわかっている。

つまり、学校の友人関係は、あらかじめ選択できる関係の範囲が決められているわけである。特に義務教育段階では、大半の子どもたちが学校も学級も自ら選択できるわけではない。特に学級担任の影響力が大きい小学校では以下三点の特徴が見出された。第一に、中間集団である学校で「友だち」が形成される。石田（2021）の議論は家族や企業などの中間集団以外の場における「友だち」を想定しているが、学校の「友だち」は所属する中間集団（学校）そのもので形成されるため、衰退や不安定化の議論に馴染まない。第二に、上述したように、義務教育段階の大半の子どもたちは学校・学級を選択できないため、子どもたちは日常的にかかわる人々があらかじめ限定されている。それに加え、学校へ通うことで人間関係が限定されているだけでなく、学級の成員間で多くの活動を一緒に行うことが（時には成員間で交流することが）半ば強制されている。第三に、小学校は基本的に学級担任が授業も行うため、1 日中子どもたちと接点をもつことになる。すなわち、子ども同士の関係を把握しやすく、彼/彼女らの関係を授業や学級活動と関連させて行動することも増加するだろう。また、中学生であれば部活動へ所属することで学級以外の関係も生まれやすいが、小学校の場合、学級における関係が中心となりやすい。

③『月刊生徒指導』におけるジェンダー

『月刊生徒指導』の特集記事は、著者の 75.4%が男性であり、『月刊生徒指導』は主に男性によって担われている。また、特集において「女」や「男」がどのように扱われているのかを整理したところ、創刊時から定期的に、「女」を対象とした特集を扱っていた。興味深いことに、「女」をテーマとした特集が定期的に組まれる一方で、「男」をテーマとして扱った特集は、唯一「男の子の性教育」のみであった。『月刊生徒指導』において、「女」と「男」をテーマにしたものが多数存在し、両者を区別して論じながら、「女」が多く語られていることが明らかになった。男女問わず問題視される「非行」「いじめ」などのテーマも、わざわざ「女子」を冠にしたタイトルを設けている記事も存在する。「女」を別にして語るということは、「男」で語るものとの間に、なんらかの相違点が存在することが示唆された。

| 年度 | 月号 | 特集タイトル・タイトル | タイトル | 著者性別 |
|---|---|---|---|---|
| 1975 | 2 | 女子生徒の問題性とその指導を考える | 学校での「男女の役割」指導の問題点 | 女性 |
| | | | 主体性を伴う人間像の獲得を | 女性 |
| | | | 「主婦」志向からの自立 | 男性 |
| | | | 男性依存社会の蟻地獄への道標　少女マンガによせる少女たちの夢 | 女性 |
| | | | 非行にみる女子生徒の問題性　最近の女子非行の特徴から | 女性 |
| | | | インタビュー 女子教育と婦人問題　志をもった女の子に | 女性 |
| | | | 座談会 女性の“自立”にとって教育とは | 女性 |
| | | | 教師的見方を越えて見なおす | 男性 |
| | | | 女子生徒の問題は婦人問題である | 男性 |
| | | | | |
| 1977 | 8 | 女子生徒をとりまく性の問題 | 中・高校生をとりまく性の問題 | 女性 |
| | | | 大久保清事件に学ぶ | 男性 |
| | | | 少女たちを性の逸脱行動に走らせるもの | 女性 |
| | | | 女子中・高校生の売春の実態と背景 | 女性 |
| | | | 妊娠した生徒に直面したとき | 女性 |
| | | | ささやかな試行錯誤とその苦悩のなかから | 男性 |
| | | | 生の問題としての性を | 男性 |
| | | | 女性の教師に期待する | 男性 |
| | | | | |
| 1981 | 11 | 特集　妊娠した女性との指導をめぐって | 〈問題提起〉 女子生徒の妊娠という事実をどう受けとめるか | 男性 |
| | | | 考え方の多様さの中で--母親の立場から | 女性 |
| | | | 問われる一人ひとりの考え | 女性 |
| | | | 社会のしがらみと生徒指導の壁 | 男性 |
| | | | 「性」を指導する一つの視点 | 男性 |
| | | | 高校生の性に取り組む視点 | 男性 |
| | | | 一人で越えなければならないハードルのはず | 女性 |
| | | | 私たちにできること | 女性 |
| | | | 「長島先生へ」・「その後のA子」 | 男性 |
| | | | 子どもを生むことと母親になること | 男性 |
| | | | 現実の問題として考えたらどうなるか | 男性 |
| | | | さわやかな高校野球を求めて | 男性 |
| | | | 「ああ!甲子園野球」おわびと訂正 | 男性 |
| | | | 青少年非行をめぐる考え方と当面の対応--東京都青少年非行問題対策委員会中間報告 | 団体 |
| | | | ルポルタージュ　蓬来中学校の実践 | 男性 |
| | | | | |
| 1984 | 12 | 妊娠した女生徒の指導をめぐって | 特集 問題提起 妊娠した生徒に卒業・出産を指導して | 男性 |
| | | | 特集 さまざまな議論の中でいま考えるべきこと | 男性 |
| | | | 特集 同じく生徒の妊娠に直面して考える | 女性 |
| | | | 特集 経験をとおしての学び--K子さんへの手紙 | 男性 |
| | | | 特集 「高校生の妊娠」問題を越えた課題をも提示 | 男性 |
| | | | 特集 一人で生きていけるまでは出産を勧めない | 女性 |
| | | | 特集 高校生としての限界の中で考えると | 女性 |
| | | | 特集 高校生の妊娠--四〇年間の事例から考える | 男性 |
| | | | 特集 覆面座談会 妊娠した生徒の指導をめぐって | 不明 |
| | | | | |
| 1984 | 6 | 特集 増える女子非行 指導のむずかしさ | 性非行論 「不純異性交遊」をめぐって | 男性 |
| | | | 女子非行増加の意味 | 女性 |
| | | | 増加する女子非行の背景 | 女性 |
| | | | 指導から逃げる非行をもつ女子生徒の問題 | 男性 |
| | | | 思春期の非行がその後の人生にもたらすもの | 女性 |

| 年度 | 月号 | 特集タイトル・タイトル | タイトル |
|---|---|---|---|
| 1986 | 6 | 特集 いじめの予防と女子生徒のいじめ事例 | いじめへの取り組みの基本的課題と展開--予防と早期発見をめざして |
| | | | 学年教師集団によるいじめ予防の取り組み--いじめられっ子リストアップ作戦をとおして |
| | | | いじめ予防・早期発見のためのアンケートのとり方、生かし方 |
| | | | 女子高生のいじめ事例とその対応 |
| | | | 学級、学年集会を開いて取り組んだ女子のいじめ |
| | | | 孤立した女子生徒の問題を扱ったLHRの記録 |
| | | | いじめられて盗みが始まったA子の事例 |
| | | 特集 いじめ問題・資料紹介 | いじめに起因する事件等の実態調査結果 |
| | | | |
| 1987 | 7 | 特集 行動的になった女子生徒 | 少女達の活動性をどうとらえるか |
| | | | 女性のライフサイクルの変化と女の子 |
| | | | 女の子の揺れる心をとらえ、伸ばす |
| | | | 生活指導担当教師として、女子生徒にどう対応するか |
| | | | 鏡の中の少女達--少女のおしゃれ志向の今日的意味 |
| | | | 女子生徒の性と自立 |
| | | | 女子の非行とアイデンティティの確立 |
| | | | 女子指導のむずかしさ--S子へのかかわりをとおして |
| | | | |
| 1989 | 1 | どうとらえる？女の子 | 言葉の問題から女の子の現在をのぞいてみると |
| | | | 難解？近ごろのギャルズ・コードを読む |
| | | | 女の子の恋愛と親離れ |
| | | | 非行少女の自己イメージ--彼女たちの描くストーリーから |
| | | | 女子のくずれと私的グループをどうとらえるか |
| | | | 生き方とかかわる性教育の模索 |
| | | | パワーに頼らない生徒指導の確立をめざして |
| | | | |
| 1997 | 1 | 特集 女の子がわからない! | インタビュ-/女の子のトラブル解読法--思春期のふつうの女の子の生活と心 |
| | | | 先生に見えない女の子たち |
| | | | 女の子のトラブルに現れた思春期葛藤 |
| | | | 女の子どうしのいじめ |
| | | | 女の子たちはなぜ食にこだわるのか　思春期やせ症とは何か |
| | | | 少女たちのセクシュアリティとジェンダーフリー |
| | | | 気泡のように発生する女子の問題行動　私の処方箋 |
| | | | 〈児童生徒の覚せい剤等の薬物に対する意識調査報告書〉より |

④　新任教師の「困難」は何か？

新任教師は 1 学期を非常に苦労しながら働いていた。彼/彼女らの語りから、新任教師の「困難」について明らかにした。第一に、そもそもの業務量が多すぎるため、担任や授業者として最低限の責任を果たすだけで精一杯であった。そのため、自らの教育実践を反省的に振り返る余裕がなかった。第二に、担任としても授業者としても未熟であるため、様々な「学び」や「助言」が用意され、それを通常業務と並行してこなしながら、「成長」することが求められていた。助言者は新任教師が担当する学級や授業に直接的な責任を有しておらず、「助言」を活かしながらが「学び」、それをふまえた教育実践の模索や結果を新任教師自身が引き受けざるを得ない状況であった。第三に、特定の学級（担当授業）と特定の教師を紐づけることで責任の個別化が生まれていた。この責任の個別化によって、教師としてのやりがいや成果を得やすい（得たことを実感しやすい）反面、教師として未熟であることが前面化しやすい。また、児童生徒との関係に苦慮した際、他の教師が代替することが難しいため、新任教師自身が対処し続けなければならない。以上を踏まえ、新任教師の担当する業務、新任教師の「成長」の責任が新任教師自身へ帰属するため、最終的には新任教師個人の努力次第へ陥ってしまうことを明らかにした。

【参考文献】

藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳、1996、「小・中学生の友人関係とアインデンティティに関する研究―全国 9 都県での質問紙調査の結果より―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』36：105-127。

石田光規、2021、『友人の社会史―1980-2010 年代　私たちにとって「親友」とはどのような存在だったのか―』晃洋書房。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所、2018、「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2017（速報版）」。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>寺町晋哉 | ４．巻<br>27 |
| ２．論文標題<br>教職を目指す学生の学校経験-友人関係、学級の経験、ジェンダー化された認識に着目して- | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>宮崎公立大学人文学部紀要 | ６．最初と最後の頁<br>77-101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>寺町晋哉 | ４．巻<br>26 |
| ２．論文標題<br>『月刊生徒指導』のタイトル分析 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>宮崎公立大学人文学部紀要 | ６．最初と最後の頁<br>147～162 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>寺町晋哉 |
| ２．発表標題<br>初任者教師の「困難」は何か？ |
| ３．学会等名<br>日本教育社会学会第72回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>寺町晋哉 |
| ２．発表標題<br>『月刊生徒指導』で語るもの/語られるものージェンダーに着目してー |
| ３．学会等名<br>日本教師教育学会第28回大会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|